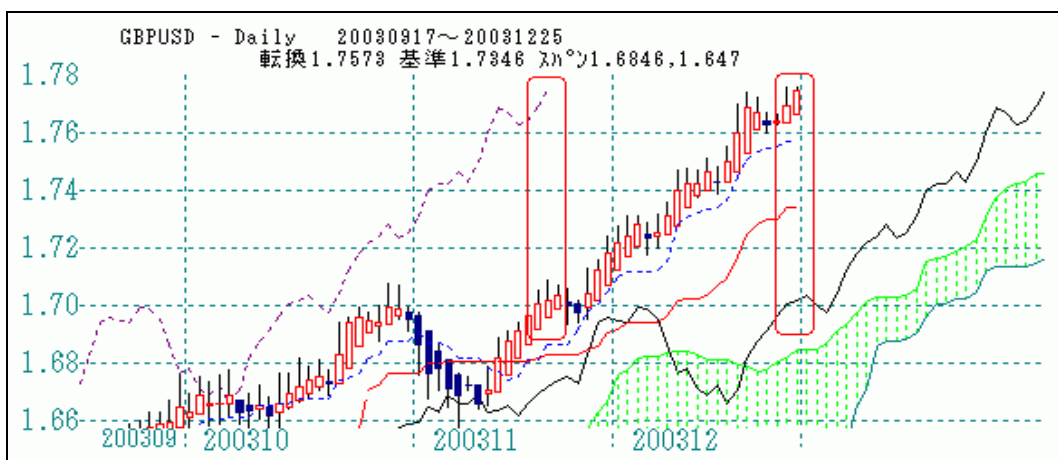


一目均衡表のバリエーション(後編)

前編では平均足に重点をおいて説明しました。以下に平均足の(ルール2)から(ルール5)までの実例を2002年夏のドル円チャートの中に示しておきますので参考にしてください。



次に、先行させた遅行スパンについて説明しましょう。先行させた遅行スパンとは当日の終値を当日を含めた26日後に記した遅行スパンのことをいいます。実際に直近3ヶ月のポンドのチャートに通常の遅行スパン(紫の点線)と先行させた遅行スパン(黒の実線)の両者を表示した一目均衡表(ローソク部分には平均足を採用)をご覧ください。



通常の遅行スパン(紫の点線)と日足との関係が左側、先行させた遅行スパン(黒の実線)と日足との関係が右側の四角で囲った部分になります。

一目均衡表では、上昇相場であるのか下降相場であるのかを判断する場合に転換線と基準線の位置、日足と先行スパンの位置、日足と遅行スパンの位置の3つを主要な判断材料にしています。これらを三役と称し3つとも同じ方向になった時にその上昇相場(あるいは下降相場)が強いトレンドであると考えます。

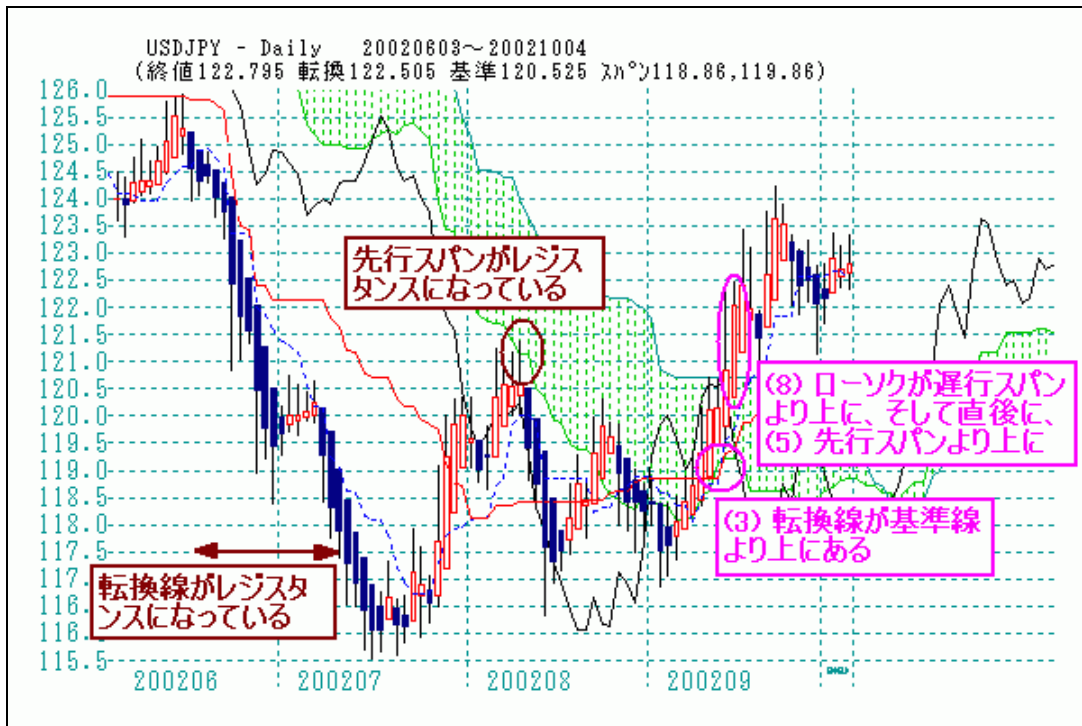
しかし、前者2つが現在の時間軸による比較であるのに対し後者は過去の時間軸による比較であること、またポンドのチャート例のような上昇相場の場合では、日足が先行スパンよりも上にあることに対し、通常の遅行スパンでは遅行スパンがその時の日足よりも上にあると上下の位置関係が異なった視点に立っています。いっぽう、先行させた遅行スパンでは、日足と先行スパンの位置関係同様、日足が先行させた遅行スパンよりも上にあると現在の時間軸で単純に比較することが可能です。

それでは、先行させた遅行スパンを採用した場合の一目均衡表の価格面についてのポイントを以下にまとめておきます。(8)が通常の遅行スパンとは異なった点となりますのでご注意ください。

- (1) 転換線を短期のサポート、レジスタンスとして使う。
- (2) 基準線をトレンドの要として傾きを参考にする。
- (3) 転換線が基準線より上にある時は買い、逆ならば売り。 *
- (4) 先行スパンを長期のサポート、レジスタンスとして使う。
- (5) 日足が先行スパンより上にある時は買い、逆ならば売り。 *
- (6) 日足が先行スパンから大きく乖離した時は行き過ぎ。
- (7) 先行スパンの捻れ(上下転換)はトレンドの変化。
- (8) 日足が先行させた遅行スパンより上にあれば買い、逆ならば売り。 *

* (3)、(5)、(8)の3つ(三役)が同方向の時は強いトレンド。

それでは、平均足と同じ2002年夏のドル円チャートを例に一目均衡表の価格面についての実例を示してみましょう。特に9月の上昇相場における三役(上記3、5、8)の現れ方に注目してみてください。



さて、一目均衡表のバリエーションとして平均足と先行させた遅行スパンを採用したチャートの概要は以上です。逆にそれ以外の部分は通常の一目均衡表となんら違いはありませんので、まず一目均衡表の基本をおさえた上であくまでもバリエーションとして考えていただければと思います。

なお、時間論については更に独自のアストロサイクルを用いた日柄分析を採用していますが、ここでは紙面の都合上説明することが不可能ですので、興味がある方は私のサイト、「アストロ・カレンダー」(<http://homepage1.nifty.com/yy/Astro/>) をご覧ください。また、2004年1月の一ヶ月間、為替の主要3通貨(ドル円、ユーロ円、ユーロドル)のチャートとショートコメントを送付させていただきますので、平均足と先行させた遅行スパンを採用した一目均衡表の例としてご活用いただければと思います。

以上